問いをもち事柄を関連付けて読む力の育成

～自律した学び手を育てるプロジェクト型学習を通して～

全国小学校国語研究所・全国研究協力委員　斎藤　照代

1　はじめに

名古屋市では、学びの基本的な考えを示した「ナゴヤ学びのコンパス」の中間案が 2023 年 3 月に策定され、子ども中心の学びを全ての学校園で実現しようとしている。全ての子どもは、適切な環境とそれを支える仲間・大人に出会うことで、自ら学びを進め、深めていく存在であると考え、ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける子どもの育成を目指している。

一方で全国学力学習状況調査の国語科の結果は全国平均を下回っているという課題がある。文章を正しく読み取ったり、思いや考えを分かりやすく発信したりする汎用的な言語能力を保障しつつ、主体的に学ぶ子どもを育てることができる授業改善が求められている。

2　育てたい汎用的な言語能力

近年、「主体的・対話的で深い学び」を実現する手法としてプロジェクト型学習が注目されている。課題解決型の学習をする際に、児童には学びを持続させていく原動力が必要になる。目的が明確になっていても課題解決の道具としての言語能力が身に付いていないと学習活動は停滞してしまう。本稿で紹介する実践においては、「ミニレッスン」という全体授業を取り入れながらプロジェクト型学習を行っている。児童が読み進めていく際の観点を示して読みの力を育てている点が評価できる。読み深めていく手法を身に付けた児童はその後の個別の課題解決学習に自信をもって取り組んでいる。こうした読みの観点や技法については体系化し系統的に指導することで他の教材の読み取りに生かしたり、他教科の学習に生かしたりすることができる。しかし、採択する教科書によって、指導内容や系統が異なることは国語科の大きな課題である。

3　自律した学び手を育てるプロジェクト型学習

プロジェクト型学習のゴールは、必然性のある目的意識が働くように設定したい。そのためには、児童が「やってみたい」「知りたい」と感じられるような導入にするための教材研究と児童の実態把握は欠かせない。さらに、質の高い問いを児童自ら学びの方策を使って解決していくことができるよう教師が環境づくりをしたり、助言したりする役割を果たさなくてはならない。30 年ほど前、日本国語教育学会の会長をされていた倉澤栄吉氏から名古屋の勉強会で「『キッズ・ウォチング』ではなく『キッド・ウォチング』が大事だ」と教えていただいたことが今でも心に残っている。子ども一人一人に目を向け、その発想を大切にした実践を通して、教科を越えて生活に生きる言葉の力を育てるという倉澤先生の教育観は今、教育改革の大きなうねりの中で脈々と生きているように思う。一人一人の学びの過程を把握して必要な手立てを講じることは容易なことではないが、ICT 活用によって工夫の幅は確実に広がっている。個別に最適な支援をしていくことによって、児童は自らの問いをもち、学び方を選び、課題解決する学習を進めていくことができる。本実践では、「学習履歴図」を用いて一人一人の学び方やペースを教師が把握して、助言をしたり、同じ問いを追究する児童同士が協働できるよう支援したりしている。また、児童がもった問いを観点別にレベル化したり、問いを一覧にして自発的な対話を生み出したりして児童が自走する学びの環境を作っている点も興味深い。有機的な言語活動が展開されると、質の高い問いが連続して生まれ、深い学びの循環が創り出される。

４　指導の実際（令和４年度１１月実践　名古屋市立大須小学校 教諭 川出　祐樹 第４学年 21 名）

（１）単元名　場面の移り変わりと結び付け、登場人物の変化を読もう　『ごんぎつね』（教育出版）

（２）目標

○　「ごん」と「兵十」の気持ちを考えていくことで、二人の気持ちのすれ違いを、情景描写と関わらせながら、自分の考えを、根拠となる本文を示して表現することができる。

○　「ごんぎつね」の魅力を見付け、自分の考えをまとめるという学習の見通しをもち、プロジェクトの学習計画を立てたり、必要に応じて計画を修正したりしながら考えをまとめようとする。

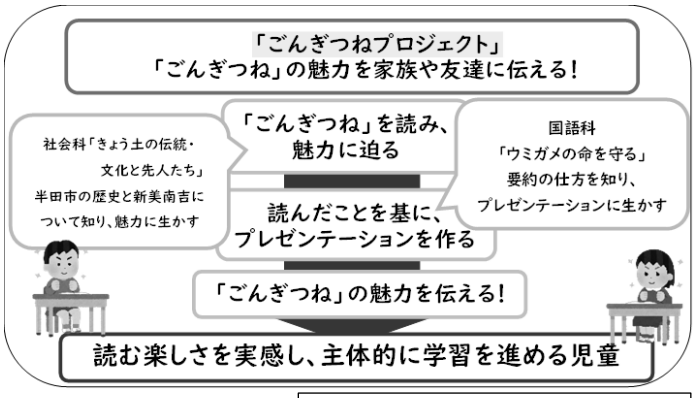
（３）学習の流れ（全９時間）

時間	学習内容・学習活動
1～2	*本文を読み、プロジェクトのゴールを設定しよう* ○　初発の感想を書く。 ○　「『ごんぎつね』の魅力を伝える」ために必要な学習計画を設定する。
3	*自分の追究する課題を設定しよう* ○　「ごんぎつね」を読んで、「問い（疑問に思ったことや知りたいこと）」を出し合い、観点別・レベル別に精選していく。
4～7	*物語を読み、「ごんぎつね」の魅力を見付けて、考えを深めよう* ○　読み進めていきたい「問い」を選び、本文を読んで、自分の考えをもつ。 ○　本文を根拠として自分の考えを、自分で選択した方法でまとめる。 ○　毎時間の「追究タイム（一人読み）」の前に、「ミニレッスン（全体共有）」で読むポイントを明確にする。 ○　同じ「問い」に取り組む児童と共有、検討しながら考えをまとめる。 ○　毎時間振り返りで、今日の学びを振り返り、次時の目標を立てる。 ※　4～7 時では、児童が自分に必要な学習を選択しながら進める。
8	*「オリジナル版ごんぎつね」を読んで、考えを広げよう* ○　比べるポイントを明確にして読み比べることで、「ごん」と「兵十」の心情を考える。
9	*学習を振り返ろう* ○　自分の考えについてプレゼンテーションで発表し合い、感想を伝え合う。 ○　プロジェクト全体を振り返り、身に付いた力を振り返る。

（４）指導の実際と考察

① 本文を読み、プロジェクトのゴールを設定しよう

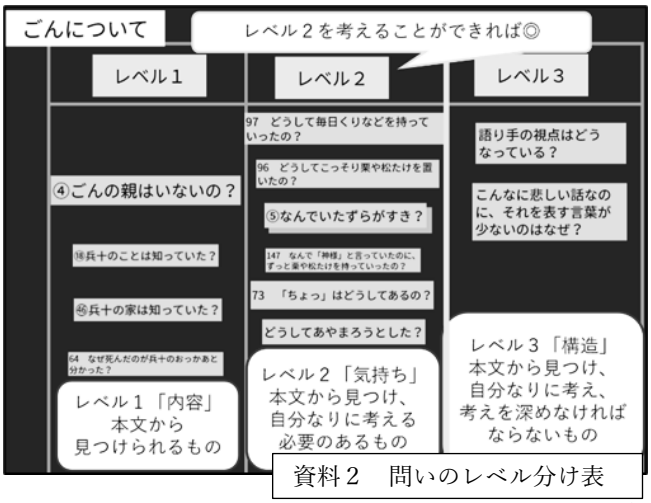
事前に教材の特徴を伝えると、児童は保護者に「ごんぎつね」について聞いてきた。しかし、保護者の反応は、「なんとなくは分かる。」「最後の場面は知ってるけど……。」という反応だった。「日本の小学生が読む物語なのに、あまり知られていないのはさみしい。」「愛知県で生まれた作者を同じ愛知県なのに知らないままなのはもったいない。」という気付きを得た。この気付きから、「自分たちが物語の魅力を見つけて、伝えよう！」と「ごんぎつね」の魅力を伝えたいという物語を読む目的をもたせた。主体的に学習が進められるようにするために、ここからは、一人一人が興味、関心に応じて追究する課題を設定し、自分なりの方法で解決を図る、プロジェクト型学習の考えを取り入れた実践を進めることとした。【資料１】



資料１　プロジェクトの全体像

② 自分の追究する課題を設定しよう

学級で、ゴールに迫るために何が必要か話し合い、「『ごんぎつね』を読んで内容や表現を知ること」「新美南吉と半田市について知ること」が必要だと決まった。「ごんぎつね」を読んで、分からないことや知りたいことがたくさんある様子だったので、みんなの疑問を解決していくと内容や表現も理解していけることを確認した。児童から出た問いを「視点別・レベル別」に学級で精選した。児童からの問いを「ごん」「兵十」「その他」の三つの視点に分け、さらにその中で三つのレベルに分けていった。レベル１は「内容」レベル２は、「気持ち」レベル３は「構造」とし、レベル２を考えていくことを目標と伝え、取り組むポイントを明確にした。【資料２】



資料２　問いのレベル分け表

③ 物語を読み、「ごんぎつね」の魅力を見付けて、考えを深めよう

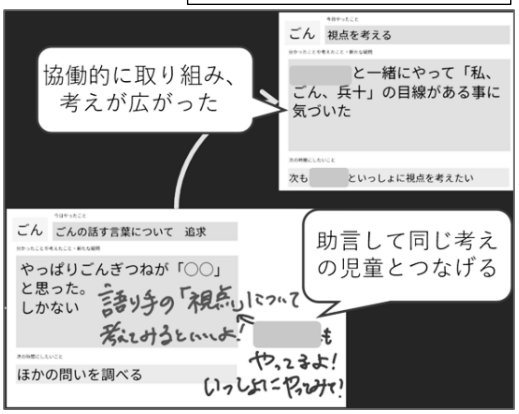
前時に精選した「問い」を基に、課題を追究する学習を４時間設けた。一人一人が課題解決の方法を身に付けるためには、単元で学習する指導事項を自分のものにし、「確かな読み」を身に付けることが必要だと考えた。「確かな読み」とは、「読むこと」に関する習得すべき「知識及び技能」を明確にし、これまで習得してきた「知識及び技能」を想起させ、その都度児童が活用できることと考える。

「ミニレッスン」では、児童に内容を捉えさせ、確かな読みの技術を身に付けさせる。「ミニレッスン」をヒントに追究タイムに入ることで、一人一人が自信をもって主体的に学習に臨める環境を作ることができると考えた。「ミニレッスン」では、「最初と最後のごん」「最初と最後の兵十」の気持ちが分かるようにポイントを焦点化して学習を進めた。読むポイントを明確にし、自分のペースで課題を追求して、一人一人が「追究タイム」へ臨めるようにした。

「追究タイム」では、誰がどの問いを考えているのか分かるように、教室後方に「問いと児童一覧」を掲示した。【資料３】自分と同じ問いに取り組んでいる児童が誰なのか確認することができ、いつでも友達に話を聞きに行ったり、一緒に考えたりできるようにした。児童は問いに対する考えがもてたら自分の名前に丸をつける。困ったら波線を引き、児童同士で互いの進捗を確認して助け合える環境を作った。

資料３　問いと児童一覧

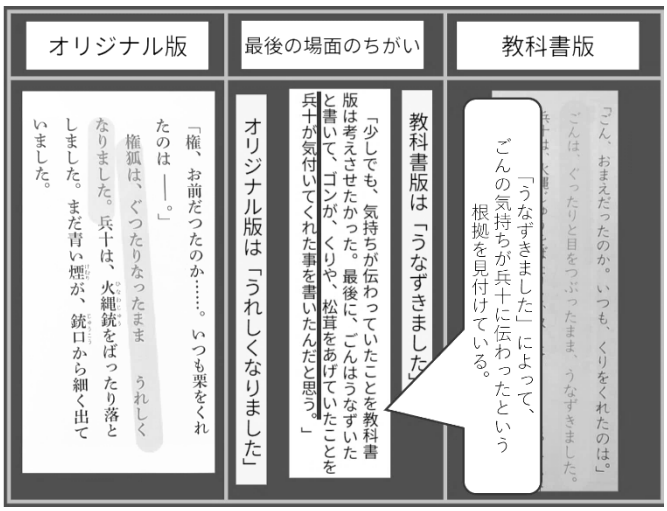
一人一人の振り返りは「学習履歴図」で行った。資料４の児童は、レベル２の内容を終え、レベル３の「語り手の視点」に近い内容に取り組んでいた。そこで、学習履歴図にコメントし、同じ問いに取り組む児童とつないだ。二人で学ぶ中で、本文の最後だけは、視点が「兵十」になっていると視点の変化に気付き、読みを深めることができた。児童は、「もし視点が『ごん』だったら」と考え、「ごん視点」に本文を書き直して考えた。書き直す活動を通して、「『うなずき』で気持ちがつながるから、この一文はどちらの視点でも外せない」と考え、「ごん」と「兵十」の気持ちがつながった瞬間が「うなずき」であると捉えることができた。



資料４　児童の学習履歴図

④　「オリジナル版ごんぎつね」を読んで、考えを広げよう

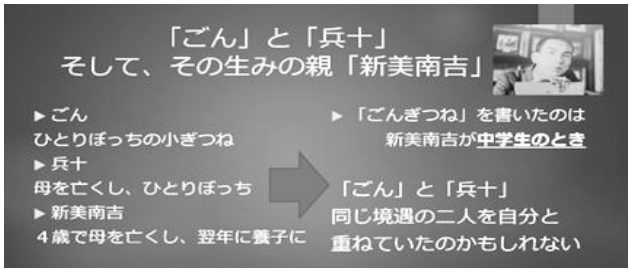
オリジナル版と読み比べるにあたって、児童たちは最後の場面で気持ちがつながったという気付きをしていた。読み比べるポイントを最後の場面に焦点を当て、考えていった。オリジナル版の最後の場面では「権狐は、ぐったりとなったまま　うれしくなりました。」とあり、この最後の場面を比較することで教科書版の「うなずきました。」の方が、「ごん」の気持ちが「兵十」により伝わったと児童は考えた。登場人物の気持ちを深く考えることができたといえる。【資料５】



資料５　児童がまとめたオリジナル版と教科書版の比較

⑤　学習を振り返ろう

「ごんぎつね」の魅力を共有し、プレゼンテーションソフトでまとめた。多くの人に魅力を伝えるため、物語の要約や、登場人物、感じたメッセージなどをまとめた。社会科で「半田市」について学習し、総合的な学習の時間で「新美南吉」について学習していた児童は、多方面から「ごんぎつね」の魅力を紹介することができた。【資料６】



資料６　「ごんぎつね」の魅力紹介の一部

読んで分かったことや、新たに出てきた疑問を、読み比べて、「ごんぎつね」についてさらに読み深めていける機会があるのは読みの深まりを実感させるのに効果的だった。それだけでなく、「オリジナル版ごんぎつね」との違いを見付けるために、粘り強く何度も読む児童が多く、主体的に読む姿にもつながっていったといえる。

最後に、プロジェクト全体を振り返り、身に付いた力を確かめた。「気持ちの変化や、新美南吉さんの伝えたいことなど、細かいところまで考えることができた。」「はじめは気付けなかったことも、本文をじっくり読むことで『ごん』と『兵十』の心のすれ違いの切なさに気付くこととができた。」など、力の高まりを客観的に把握した記述があった。また、「友達と交流し合ったり、自分で考えて読んだりする方法が分かった。自分で興味をもって考えることができるので楽しい。」と、学びを調整する力の高まりや主体的に学習に取り組めていることを実感したことがうかがえる記述もあった。

５　成果と課題

○　問いをレベル別に精選したことで、取り組みたい課題を児童自身で設定でき、進めやすくなった。「レベル１から始めようかな。」「レベル３は友達と考えたいな。」など、見通しをもって読む活動に入ることができた。レベルに合わせて一人一人が自己調整しながら学習を進めることができた。

○　「ミニレッスン」によって、読むポイントを意識して児童自身で取り組むことができた。自己調整学習の中で、個人で読み進めていく時間も増えていくが、「ミニレッスン」で内容について全体で確認しながら進めていける時間を確保できるので、読むことに不安がある児童にとっても手助けになった。

●　自分の取り組む問いを選択しても、一人ではなかなか取り組めない児童がいた。教師が児童と児童をつないだり、個別支援することで学習を進めることができたが、児童が問いを設定する段階で、どの問いから取り組んでいくのか個別に支援していく必要があった。